

カミツキガメ

【カミツキガメの生態】

背甲長49cmに達する大型の水生ガメで、北米の冷帯から熱帯までを原産地とする。河川、湖沼、人工的な池や水路、湿原、汽水域など多様な環境に生息するが、緩やかな流れや止水中の、水生植物、岩、沈水木などが多い場所を特に好む。肉食傾向が強く、主に魚類、両生類、小型のカメ類、甲殻類、貝類、水生昆虫等を捕食する。普通1年に1度産卵する。1度の産卵数は20～40個のことが多いが、稀に100個を超えることがある。原産地では上位の捕食者である（日本生態学会編、2002）。



カミツキガメ（兵庫県川西市猪名川にて2003年捕獲）

【侵入経緯と県下の分布状況】

カミツキガメは1960年代から、アメリカ合衆国から日本国内にペットとして輸入されて、安価に販売されている。成長するにつれて攻撃的になるため、持て余して野外に遺棄されたものが、沖縄を含む日本各地の都市部や郊外の池、水田、湖沼、河川等でたびたび確認されている。野外での繁殖を裏付ける小型の幼体も見つかっており、各地ですでに定着している可能性が高い。千葉県北西部の印旛沼とその流入河川ではすでに繁殖していると考えられている（日本生態学会編、2002）。

カミツキガメの北限はカナダ南部に達しており、他の生息条件が満たされれば、気候的には千葉県に限らず日本各地で定着する条件を満たしている。兵庫県下では散発的に地元の警察署あるいは水族館などの施設に届けられているが、定着の可能性を示す幼体の捕獲情報については不明である。

【影響・被害】

攻撃性が強く甲羅長30cm程度の個体でも、口先に近づけた葦茎を大型ニッパーのように瞬時に噛み切る。カミツキガメを大型のイシガメやクサガメと思い込み、それを捕らえようと手を出す子どもに対する被害が懸念される。また4肢の爪も極めて鋭く、厚手のビニール袋をいとも簡単に切り裂く。また日本の淡水域には本種のような大型で、広食性の捕食者は存在しないため本種の移入・定着は、日本の淡水生物に重大な影響を

与えらるる。

【カミツキガメを始めとした危険な虫類に対して兵庫県でとるべき対策】

○普及啓発の徹底

カミツキガメは甲長 50cm に、同じようにペットとして売られているアメリカ南部産のワニガメでは甲長 80cm に達する。主として肉食性のこれら大型のカメはペットとして飼育することが非常に困難であることを周知させるべきである。

カメ類は寿命が長く、小型の種であっても通常 50 年と言われている。人間の寿命と比較して、ペットとして責任をもって飼育するのが困難な動物であることを承知すべきである。

カメ類と同様、各種のワニ類についても、もっとも小型の南米産コビトカイマンで 1.5 m、アフリカ産コンゴコビトワニで 1.5 m、インド産イリエワニでは 7 m に達することから成体を飼う覚悟なしに、かわいいからと幼体をペットとして飼うべきではないことを周知させるべきである。パンフレットやビデオによる広報普及を徹底して行う。

現在、ペットとして販売されているこれら危険爬虫類のうち、気候的に兵庫県への定着がもっとも危惧される種はカミツキガメである。

○早期発見監視システムの確立

侵入初期における早期の徹底的な駆除が、外来生物対策として最も有効な手段であるため、移入種監視システムにより早期の発見に努める。

- ・警察からのカミツキガメを含む危険爬虫類情報の収集
- ・内水面漁業協同組合に危険爬虫類情報の迅速な伝達を依頼
- ・河川・ダム湖等の現場からの危険爬虫類情報の収集
- ・県民からの危険爬虫類情報の収集ルートの整備とその広報

○「外来生物対策本部」に情報を集約

- ・これらの情報を一元管理

○生息状況の確認担当部門を「外来生物対策本部」に設置

- ・発見されたカミツキガメが、飼い主の遺棄による偶発的なものか、繁殖・定着によるものかを、調査し、確認する。

○駆除方法の検討

- ・効果的な駆除方法をあらかじめ調査、検討し、初期侵入の段階で有効な駆除方法をあらかじめ確定しておく。

○県民からの持込個体の処理体制の確立

- ・捕獲した個体の殺処分は一般の県民には困難であり、処分にコストがかかる。
- ・県民が自主的に捕獲した個体の処理は、持ち込み場所を用意し、再放逐されることのない体制を敷いて、処理ルートを周知徹底する。
- ・ペットとしての飼育個体の引きとり処分の費用に関しては、買入時に処分コストを上のをせするなど、野外への安易な放逐を防止する処理体制を確立する。